

(研究ノート)

柳沢吉里の二人の母の死

― 付・「染子家集」「定子追悼文」 ―

宮川 葉子

キーワード

柳沢吉里 柳沢吉保 飯塚染子 曾雌定子 染子家集 定子追悼文

はじめに

本稿は、柳沢吉保（二六五八―一七二四）の嫡男吉里（二六八七―一七四五）の実母飯塚染子と、嫡母曾雌定子^{そしだこ}の逝去を考察したものである。考察にあたっては、吉保側室正親町町子の『松陰日記』^{まつかげ} 卷廿一「夢の山」（宮川葉子『柳沢家の古典学（上）―『松陰日記』―』・平成十九年一月・新典社）、吉保時代の柳沢家の公的日記「楽只堂年録」^{らくしやう}（全三二九卷。漢文体と和文体二本が存するが、完本であることをもって和文体の一本に依った。楽只堂は吉保の号）、染子の詠歌を手鑑にした「染子家集」（柳沢文庫蔵）及び吉里自作自筆の定子追悼文（山梨県甲州市〔合併前は塩山市〕にある武田家の菩提寺恵林寺蔵）^{えりんじ}をおもに参照した。因みに『松陰日記』は吉保一代の栄華の記録。『源氏物語』をはじめ平安期の文学作品を多く引用しつつ綴られた擬古文で、しかも江戸期に

おける公家の息女という特別な位置づけを持つ。大老格に至った柳沢家の研究のみならず、『源氏物語』の受容という観点からも、大いに活用されるべき存在である。

さて吉里は、和歌を愛した父吉保の薫陶よろしきを得て生涯二万首以上の和歌を詠んだ。初期の和歌師匠は幕府歌学方の北村季吟^{きたむら}。後には正親町子^{あきのみち}の縁で開けた公家との交流の中で、中院通茂^{なかつのいんみちもち}、同通躬父子^{なかつみ}の添削を受ける。さらには町子^{まちこ}の実父正親町公通^{きんみち}を窓口^{きんみち}に、吉保共々数年間^{なかいげん}にわたり霊元院^{れいげん}（一六五四―一七三二・在位一六六三―一六七）の添削にも預かる。また季吟から古今伝授した吉保（元禄十三年（一七〇〇）八月）は、それを吉里に授けた。こうした吉里の環境に関しては、既に拙著（上記『柳沢家の古典学（上）』）で述べたところであるので繰り返さないが、本稿では武家歌人としての吉里の才能は、父親のみならず母親染子譲りでもあったことを「染子家集」を通して確認したい。

それと同時に、嫡母と実母が共に暮らす柳沢家の中での、嫡男のありようとは、如何なるものであったのか、その現実も把握しておきたい。吉里が嫡母定子の逝去に際し綴った哀悼文は、それを窺うに足る資料。そこに盛り込まれた吉里の文学的素養も勘案しながら、江戸期の一夫多妻の一面を捉えたい。

(一)

元禄時代（一六八八―一七〇三）を中心とする五代將軍綱吉（一六四六―一七〇九・在職一六八〇―一七〇九）の治世^{ちせい}、側用人^{そばうにん}として大老格に至り、天領（幕府直轄地）甲斐国を賜ったのが柳沢吉保（一六五八―一七二四）である。柳沢家は武田信玄の家臣団の武川衆^{むかわ}。自らの出身地を賜ったのは最上、最高の榮譽であった。

一方吉保には、正室曾雌^{そし}定子^{ていし}の外に、飯塚染子^{いづまぞうし}、正親町町子^{あきのみちまちこ}、横山繁子^{よこやましげこ}、上月柳子^{うづみか}、片山梅子^{かたやまうめこ}、祝園閃子^{いはるのぼるこ}と都合六人の側室があった。もっとも全員同時に側室であったわけではなく、順次、柳沢邸入りを果たしたのであったが、今はその詳細は省く。

延宝四年（一六七六）二月、十九歳の吉保は同族の曾雌^{そし}定子^{ていし}十七歳と婚姻。しかし二人は十年近く経っても子供に恵まれない。時に吉保は二十八歳。その五年前（延宝八年（一六八〇））の綱吉將軍就任後は着々と出世。従五位下出羽守、小納戸上席、一千石を頂く身分に至り、お世継ぎの

確保は必須となっていた。そこに最初の側室として入ったのが、吉保の生母（本院・佐瀬氏）の侍女であった飯塚染子。

一族の期待の中、嫡男吉里が誕生。貞享四年（一六八七）九月三日のことである。前年染子は一男児（葬地・法号共に不詳）を儲けたが、生後二日で逝去。それを承けての吉里誕生であった。その後も染子は二男一女をあげるがいずれも早世。結局五人のうち四人が、三歳を待たない旅立ちとなった。当時の幼児の死亡率の高さを語る悲しい現実である。生き延びた吉里の方が例外的であると言っても過言ではなかったのである。ここに個人的感情はともかく、お世継ぎ確保を目的とする、側室の存在の重要性が理解されなくもない。まさに一族の繁栄は子宝、それも男児誕生の有無にあった。

それから二十年近くが経過。宝永二年（一七〇五）五月十日、染子は逝去した。享年三十九歳。同年二月には吉保が甲斐国を賜り（決定は前年十二月二十一日。実際に家臣が甲斐国へ向かい、受け取りの儀式をなしたのは二月十九日）、実質的な石高は二十二万石余に至った記念すべき年でもあった。

（一）

実際の染子の病臥の様を、『松陰日記』に見てみよう。

後の卯月にもなりぬ。侍従君の母君、此頃そこはかとなく悩みわたり給ふが、その事、たて、いみじき心地にもあらねば、御薬の事などまめやかに物し給へど何のしるしもなし。いと強き心物し給ふ本上にて、年頃常の篤^{あつし}さなどはおはせぬ程に、いさ、なる風の祟りのやうにて、しばしは試み給へれど、やう／＼日数に添へて身なども温^{ぬる}みがちに、物心細ければ、御前にも御心騒^{さわ}ぎし給はせつ、、医師などの事まめやかに仰せおりたち扱ひ給ふ（七六三頁）。

「後の卯月」とあるように、宝永二年は四月が閏月であった。その閏四月、侍従君、即ち吉里の母君染子が、取り立てて何処だというのではないけれど加減が悪くなったのである。「いと強き心物し給ふ本上」からは、従来心身ともに頑強な染子の様子が察しられ、病臥は誰からみて

も意外であつたらしい。風邪かもしれないと、その方面の投薬などもなされたが効果はなく、日が経つにつれ「温みがち」になつていった。

一方、「樂只堂年録」の閏四月十九日の条には、「吉里が実母の病重きによりて登城せず」（第一六六卷・二六オ。漢文体は「吉里が産母の病状危篤故不_レ登城_二」）とあり、殆ど無欠勤で綱吉に仕えて来た吉保の欠勤が知られる。染子の「病重きにより」、「病状危篤故」（漢文体）であつたからである。具合が悪くなつたのはいつ頃からかは、はっきりしないのであるが、閏四月十九日には危篤であつたことだけは確かである。

因みに、「そこはかとなく悩みわたり給ふ」は、『源氏物語』御法卷冒頭部で、紫上の病状が悪化する箇所、「紫上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかとなく悩みわたりたまふこと久しくなりぬ。」（傍点宮川、以下同）とあるのを意識しての表現であるのは、一言一句違わない引用に明かであろう。さらに、「温みがちに」も、若菜下巻、女樂直後の紫上の発病を、「夜更けて大殿籠りぬる暁方より御胸を悩みたまふ（略）御身もぬるみて、御心地もいとあしけれど」云々とあるのと、手習巻で、一向に快方に向かわない浮舟を介護する妹尼が、「いかなれば、かく頼もしげなくのみはおはするぞ。うちはへぬるみなどしたまへることはさめたまひて、さはやかに見えたまへば、うれしう思ひきこゆるを」と嘆く箇所に見える。熱がある病状を「温む」と表現する『源氏物語』の用例は右の二つのみで、町子はそれを意識していたと思しい（七六三頁〔注釈〕二・三参照）。

(三)

周圀の手厚い看護や、東叡山寛永寺の公辨法親王（後西院皇子。輪王寺宮。天台座主）の祈祷、綱吉や綱豊（六代將軍家宣。一六六一―一七二二・在職一七〇二―一二。吉保の尽力で甲府宰相から、綱吉の養継嗣となり、当時は西の御所と呼ばれていた）や御台所（綱吉正室）、御簾中（綱豊正室）等からの見舞いなどが効を奏したのか、染子は一時持ち直す。

菖蒲^{あやめ}さす頃は、まして軒端の露も涼しくこぼれわたるを、大方の心地だにおかしきに、かくてをこたり給へる有様の甲斐ありと皆思ほし宣ふに、片へは催されて臥しなどしたまはず。端近く寄り居てせて見出し給（七六六頁）。

「をこたり給へる有様」に、周囲は看病の甲斐があったと喜ぶ。染子は「片へは催され」、即ち周囲の期待に励まされ「臥しなども」しない。しかしそれはものに寄りかかって「せめて」（なんとか頑張つて）庭を見いだす程度の回復でしかなかった。御法巻で、臨終間近な紫上が、「前栽見たまふとて、脇息によりゐたまへる」場面を彷彿させる（七六八頁〔注釈〕一三参照。この頼りない、つかの間の快復は程なく悪化。

「今はさりととも常の様ならんも程なくや」など人々思ふに、一二日過てまた悩ましようなどいふ程に、誰もくありしよりけに思ひ惑ひて、修法などもまたさるべき人々召して事加へて宣ひつ、（略）侍ふ人々など内外、なく皆夜昼扱ひこうじたれど、「猶つるにいかに見なし聞こえん」と思ふがいみじければ、すべて物も思はず扱ひ聞ゆ（七六九頁）。

という事態に陥つたのである。

「今はさりととも」以下、「思ひ惑ひて」のあたりまでは、『源氏物語』葵巻で、葵上が夕霧を出産した直後の場面に、「多くの人の心を尽くしつる日ごろのなごりすこしうちやすみて、今はさりとともと思す」とあるのや、同巻の葵上の急逝に遭遇した左大臣邸の有様を、「今はさりとともと思ひたゆみたりつるに、あさましければ、殿の内の人、物にぞ当る」などを意識しての表現であろう（七七〇頁〔注釈〕一参照。さらに「侍ふ人々など内外、なく皆夜昼扱ひこうじたれど」の「こうじたれど」は、明石巻冒頭で、源氏の夢枕に立った桐壺院の亡霊が、「海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど」云々と、須磨までたどり着くのひどく疲れたと訴える箇所用いられている。『源氏物語』を大いに意識しているのは、改めて指摘するまでもなからう。

（四）

ついに来るべき時が来てしまった。染子の臨終は次のように語られている。

かくて十日の昼つ方、「いたう苦しう」など俄に人騒ぎ聞ゆる程もなく、やがて失せ給ひぬ。今は限りとも誰かは思ひなさん。たゞ呆れに呆れて珍らかにいみじう思ひ惑ふ。君はさるべき年頃の御契りなをざりならず、かう見なし給ふべくは夢にだに思しかねば、たゞくれ惑ひ給ふ程道理に、見る人さへ涙は浮きぬばかりしほれて、内外の男女ある限りよ、と泣きぬ。まして侍従君のせちに思し嘆く様、又こしらへかねたり（七七〇―七七二頁）。

この十日は五月十日である。「菖蒲さす頃」、「軒端の露も涼しくこぼれわたる」（前項（三）引用の前半）のを頼りなげに眺めていた染子。このあたりの描写は、『玉葉集』巻第三夏歌収載の、「百首御歌の中に」の詞書をもつ後鳥羽院御製、「あやめふく かやが軒ばに風過ぎて しどろにおつる むらさめの露」（三四五番歌）を意識しているかと思うが、それはともかく、十日の昼つ方、染子はずいに帰らぬ人となった。

そもそも、『松陰日記』は、吉保の栄華を女子供にも理解がたやすいよう、擬古文を用い、「楽只堂年録」をかみ砕いて綴り直したものと考えられるのであるが、その分、右の描写に察しられるように、個人的な感情も大いに盛り込まれているのである。

「君はさるべき年頃の御契りなをざりならず」とは、吉保と染子の二十年以上に及ぶ契りのありようを述べる。既に述べたように、染子是最初に柳沢邸に入った側室。しかも吉保との間に五人の子供を設けたのである。契りの深さは疑うべくもない。染子の死を眼前にした吉保は「たゞくれ惑ひ給ふ」ばかりであった。時に吉保四十八歳。

そして吉里。「まして侍従君のせちに思し嘆く様、又こしらへかねたり」がその悲しみを充分に代弁していよう。時に、吉里十九歳。前年一月、酒井忠孝女頼子と婚姻関係に入っていたのであったが、やはり実母を喪った悲しみは、妻の存在で慰められる種類のものではなかったらしい。誰の慰めも受け入れられないでいた様子が伝わってくる。

一方「楽只堂年録」は、染子の逝去を、「今日八つ時前に、吉里が実母橘染子死去す。吉保は遠慮三日。吉里は忌五十日。服十三月」（同上巻・三二）とのみ記録する。公的日記の性格上、個人的悲しみは除かれ、事実の記述のみに徹しているのがわかる。さらに側室の死に際し吉保には服喪の義務はなく「遠慮三日」のみであった。いかに吉保と染子の年来の関係が「なをざりならず」でも、服喪の義務の有無とは無関係な

のである。それが江戸期の武家の規律であった。側室の立場の軽さが窺える。

実は『松陰日記』にはないのだが、「楽只堂年録」(同上巻・五月十三日の条(三六ウ))以下には、五月晦日までは連日、吉里の落胆を彷彿させる記事が録される。それらは、「吉里が朦氣を御尋とて」云々と始まり、綱吉を初め綱豊、御台所、御簾中、五の丸(綱吉側室。亡き鶴姫の生母)等が、吉里の朦氣(氣が塞がっている状況)を心配して見舞を寄越す連続の記事である。

「朦氣」の文字は五月晦日を限りに「楽只堂年録」から姿を消すが、それは吉里が「朦氣」を五月いっぱいまで断ち切ったというのではあるまい。吉里が本当に立ち直れたのは、同年七月十二日に妻頼子が女兒(保子)を出産した時であったと考えている。保子は吉保が自らの名の一字を採って命名したのであったが、染子の生まれ変わりのようなタイミングでの誕生であった。もともとこの子も翌宝永三年(一七〇三)九月三日にわずか二歳で逝去してしまうのであるが。

(五)

染子の葬儀は五月十一日になされた。前日十日の正午過ぎに逝去、その夜が通夜、そして翌日が葬儀という手順であったらしい。「楽只堂年録」には、

暮六つ時に、吉里が実母、橘染子を龍興寺に葬る。法名靈樹院月光寿心大姉(同上巻・三五オ)。

とある。一方『松陰日記』は、

骸を見つ、はなぐさめ難う憂き道理を嘆かせ給。泣くく葬りの事、とかく扱ひ騒ぐ程又いみじう悲しき事多かり。龍興寺にぞ率て行くめり。何くれと厳しういみじきも事果て、たゞ儂き御名のみきらくとして残れるぞ、見るに目くれ惑ひて悲しう、送りせし人々もやがて

覆、れ臥したり。靈樹院殿とぞ言ふめる。(略)四十路に今一つ足り給はず。さる類ひなき榮を目のあたり見さして消え給ひぬるが、いみじう惜しき事、誰もく朝の露に異ならぬ世を、今さらに驚かされて涙のみ尽きせず(七七・七七四頁)。

と表現する。「骸を見つゝはなぐさめ難う」は、『古今集』卷第十六哀傷歌収載の、「ほりかはのおほきおほいまうち君身まかりける時に、深草の山にをさめてけるのちによみける」の詞書を持つ僧都勝延の歌、「うつ蟬はからをみつゝもなくさめつ深草の山けふりたにたて」(八三一番歌)を本歌とする(「ほりかはのおほきおほいまうち君」は、九条右大臣師輔二男の、忠義公藤原兼通)。町子の有効な引用である。

そもそも柳沢家の菩提寺は、江戸市ヶ谷の正覚山月桂寺。吉保の父安忠が卒した後、吉保は寺領を寄進して増改築を手がけ、綱吉に頼み関東十利に列せさせた寺である。正覚の山号も安忠の法名に依っていた。しかし染子が葬られたのは龍興寺。これは染子の実家飯塚氏の菩提寺であったと思われる。同月二十三日、つまり二七日にあたる日、吉保は龍興寺に毎年百俵の寄進を約し、染子とその腹に誕生し夭折した四人の子、及び、染子の両親の位牌を祀らせている。

『松陰日記』本文に戻ろう。「儂き御名のみきらくとして残れる」とは、位牌に刻まれた法名「靈樹院月光寿心大姉」のこと。特に「月光」とあるのから「きらく」としたらしいが、いまや「きらく」しいのは位牌のみになってしまったのである。まさしく「誰もく朝の露に異ならぬ世」であった。

(六)

柳沢文庫には、「染子家集」として残される折帳一冊がある。吉保と染子を取り交わした折々の贈答歌のうち、染子の詠歌(大半が吉保からの贈歌へ対する返歌)を、彼女亡き後、吉保が整理。手鑑(染子自筆の短冊を画帳に貼り込んだ物)に仕立てた一本である。あまり知られていないが、吉里生母の貴重な記録でもあり、ここに翻刻して収載しておく。

その場合、詞書にあたる吉保の説明書きは【一】内に入れてポイントを下げて表示した。和歌は大半が二行書きながら、紙幅の関係上、一行

書きに改め、読みやすさを求めて、私に適宜句読点と濁点を付した。丁数は「一」を付した上、極小のポイントで各丁の冒頭に示した。さらに論の展開上、各歌に通し番号を付した。

〔一オ〕

染子より贈答の哥、まへくのは、元禄十五のとし、四月五日に焼失し侍りぬ。其後とりかはし、みづからかくれるを、我文匣よりたづねあつめて手鑑になしぬ。みな当座の詠哥にて、後、また引なをされしにより、彼家集とは、哥さま粗ちがひ侍る也。題にむかひて当座によまれし哥も、我方にて、みづからか、れしをあつめて末にのせ侍る也。

宝永二年八月廿日

少将集
花押

〔一ウ〕

【元禄十五年秋、菊に添て哥遣しける返しに】

1. 返し 秋までもあせぬ契やしらぎくのはなはへある露の言の葉

【また返しの哥、遣しける返しに】

2. 又御かへし あだなりし花の色かはいにしへのためしもきくの千代の契を

【元禄十五年の冬の頃、哥遣しける返しに】

3. 契をさしそのむつごとを命にてつれなき世どもすごしぬるかな

【元禄十五年歳暮の哥を遣しける返しに】

4. 御返し このくれやにきはふ春を松竹にしめゆひはゆる千代のことぶき

〔一オ〕

【元禄十六年正月二日、春のことぶきを衣に添て哥遣しける返しに】

御返し

5. 千代をまつながきぢぎりのうれしさをつゝむこ袖や身にあまりぬる
6. けふことに松のときはやあひ思ふ万世ちぎるはじめなるらん
7. よろづ世もかならずしるしあら玉の春のためしのなかのぢぎりに

〔二ウ〕

【元禄十六年秋、菊に添て哥遣しける返しに】

8. 御返し 千代も見んみぎりの菊の花の色にかはらずふかきことの露

【元禄十七年春、花に添えて哥遣しける返しに】

9. 御返し 手折来しまがきの花の色になをたづきながらを見まくほしけれ

【元禄十七年春、花の頃、駒込よりこされける哥】

10. みせまほしかならずむかふ春ながらまだ待どをき花のさかりを

【元禄十七年春、花の頃、駒込にあられるに、哥遣しければ返しに】

11. 御返し かばかりもあたらさくらをみぬ人に吹つたへてよ花の山かぜ

【宝永元年夏、芥子の花送られけるに、哥遣しければ、返しに】

12. 御返し ことの葉にかけしは深き露なれやいろもにほひもなつ草の花

【宝永元年秋、菊に添て哥遣しける返しに】

13. 御返し 誰がためといはでもにほおみなへしなさをくれぬ露のよそほひ

〔三才〕

【宝永元年秋、紫苑の花に添てこされける哥】

14. 言の葉にかけてもや見んにほはねど花むらさきのゆかりばかりは

【宝永元年秋、駒込より帰られける時、花に添てこされける哥】

15. あかずのみ千種をわけし帰さの名残と手折花を見せばや

【宝永元年秋、菊に添て哥遣しける返しに】

16. 咲ぬともまたしらさくの花の色にちとせやむすぶかつにはふ露

【宝永元年秋、尾花に添て哥遣しける返しに】

17. 御返し 手折来し見るに尾ばなも誰をかはまねきなれたる袖の秋かぜ

【宝永元年秋、菊に添てこされける哥】

18. いかに見むむらさきふかき一もとの花にうつろふ菊の上の露

【宝永元年秋、菊に添て哥遣しける返しに】

19. 御返し こゝろざしふかき色香にをきそへてふりぬ千年を菊のしら露

【宝永元年秋、菊に添て哥遣しける返しに】

20. 御返し 契るぞよさかゆく宿にうつしをく露も千とせの菊の色かを

〔三ウ〕

【宝永二年春の末に、牡丹に添て哥遣しける返しに】

21. 御返し 露ながら手おれる花のふかみ草ふかき心の色とこそしれ

【宝永二年春の末に、山吹に添て哥遣しける返しに】

22. 御返し 行春の名残とやみる心よりことの葉ふかく匂ふ山吹

【宝永二年四月、中の十日の頃、三色の花に添て哥遣しける返し 是を終とはおもはざりき】

23. 御返し まちつくし折そふ花のかきつばたにはへどふかき色はへだてず

【会につらなれりける終】

24. 名前花 山ふかみかすみも色ににははせてはなによしの、春の名高き

〔四オ〕

【年月不知】

25. 暮秋雨 軒端もる音もひさしくそぼちつ、ふり行秋の夕ぐれの雨

【元禄十五年】

26. 歳暮 あひ思ふこゝろのまゝにまどゐしていはふにあかぬ年のくれ哉

【元禄十六年春】

27. 試筆 あら玉の春のみどりの松にふく声ものどけき千代のはつかぜ そめ

【宝永元年】

28. 六月祓 おもふ事をのがさまぐみたらしの河瀬はおなじ御祓成らん

〔四ウ〕

【宝永元年秋、紅葉に添てこされける哥】

29. 山ふかみ紅葉はさぞなこのころのしぐれにもれぬ色をみせばや

【宝永元年秋、紅葉に添て哥遣しける返しに】

30. 御返し またたぐひあらじもよきてからあるのにしきにまざる宿のもみぢば

【宝永元年秋の末に、松の戸の紅葉の頃、こされける哥】

31. 花の、ちとひ来ぬ人をまつの戸の蔦は紅葉の色もかひなし

【宝永元年冬、雪ふりける朝、梅の花に添て哥遣しける返しに】

32. わきてこの匂ひにぞしる梅がえにふりはゆる雪の色にまがへと

【宝永元年十二月廿二日、甲斐国拝領の慶賀に】

33. 甲府たまはらせ給ふを

浅からずそひし恵にきみがしるかひのしらねの雪や見ゆらん

【宝永二年春、紅梅に添て哥遣しける返しに】

34. 御返し くらべずもいかにひもときかはるこの花にあかもの色はおよばじ

〔五才〕

【宝永二年、吉保居間にての当座】

二月十九日、甲斐の国をうけとらせ給ふことぶきて

35. かひがねをこゝろにまかせいく千代もさかへむはるのけふにのどけき

〔五ウ〕

【宝永二年】

36. 三月三日 今日のエにかざせ咲そふも、の花いろに三千世の春を契りて

【宝永二年四月朔日の夜、吉保居間にての当座
花鳥の色音ばかり
かきりにはあらで】

37. 暮春 花とりのいろ音もけふにかざるよりなれ来し春のおしき夕暮

【右同夜当座】

38. 更衣 花はまだ木ずえに見るを名残なくけさぬぎかへし袖は匂はず

(七)

吉保の手になる「染子家集」序文後半に、「題にむかひて当座によまれし哥も、我方にて、みづからか、れしをあつめて末にのせ侍る也」とあるのから、当該家集は、前半に染子の返歌を収載（1～23番歌）、後半（24～38番歌）は、染子自らが染筆した歌会での当座詠を、吉保の文厘から探し出して収載したという編纂のありようがわかる。35番歌の詞書「宝永二年、吉保居間にての当座」などからは、柳沢家の私的な歌会は吉保の居間でなされたことも知りうる（37・38番歌も同様）。

家集全体を眺め渡して知られるのは、花に添えた贈答が多いということであろう（1・2・8・9・12～23番歌）。季節の草花に歌を添え、料紙の

色にも配慮を惜しまない贈答は、『源氏物語』にも多く見られるところであるが、染子が返歌に用いている小短冊は、かなり凝った唐紙が多く、吉保との贈答が雅な王朝趣味に包まれていたのが察しられる。

ついでに以下三、四箇所、注目しておきたい記事がある。

その一つ。10・11・15番歌の詞書に見られる「駒込」である。これは柳沢家の下屋敷六義園のこと。ここは和歌の精神を最大限取り込み、紀伊国和歌浦周辺を写し取って作庭され、四季折々の風情が楽しめるよう、吉保自らが八年がかりで設計した池泉回遊式庭園であった。染子はそこへ出かけ吉保に和歌を贈って来たのである。10・11番歌は春、15番歌は秋に出かけたことがわかるが、こうした記事は、六義園が側室達の気晴らし先としても大いに活用されていたのを窺わせる。

次に23番歌の詞書、「宝永二年四月、中の十日の頃、三色の花に添て哥遣しける返し 是を終とはおもはざりき」。「まちつくし」の歌が染子の辞世となってしまったのである。

宝永二年四月中の十日とは、彼女が発病する一ヶ月前にあたる（宝永二年は閏四月があったのは既述）。この頃は元気であった染子。まさか二ヶ月後に逝去するとは…の思いが、「是を終とはおもはざりき」に看取できる。この文言は、『伊勢物語』百二十五段（最終段）の「つひにゆく道」に、「むかしおとこわつらひてこ、ちしぬへくおほえければ つゐにゆく道とはかねてき、しかときのふけふとは思はざりしを」（大和郡山市社会教育課保管文書『伊勢物語』に依った。吉里自筆本で、『宝永六年周初二』に書写の旨の奥書を持つ。詳細は後日に改める）とあるのを踏まえるか。

三つ目が31番歌の詞書と和歌に見られる「松の戸」「まつの戸」である。「松」に「待つ」を懸けるのは常套であるのは今おき、ここの「松の戸」は染子の居住地内の庭に建てられた「小齋」の呼称であつたらしいからである。

『楽只堂年録』第一七〇巻、八月二十日の条は、染子の遺品の多くが龍興寺に奉納される記事を収載する。その遺品の中に、

靈樹院が居たりし庭に小齋を構へて松戸亭と名づく。それに掛たる狩野常信が画ける小倉山庄の絵に、冷泉為綱卿の讃ある掛物一幅（二四

オ、二四ウ）

があった。これにより「松の戸」の意味するところが明かになるのである。「小齋」は小規模な離れの書斎のようなものであったかと想定するが、五人の子の四人までを亡くした染子は、仏道にも極めて熱心であったから、念誦堂のような役割を果たす存在であったかもしれない。

一方、近年柳沢文庫に入った大井家文書の一つに、「松戸明題部類全」と題される詠歌題を集めた一冊があり、拙著（前掲『柳沢家の古典学（上）』）を纏める際、標題の「松戸」は松戸亭に因み、「染子の居室の呼び名か」（七八五頁〔余説（二）〕）としておいたが、ここに染子専用の「小齋」の名であったと訂正しておく。「松戸明題部類全」も、この「小齋」で編まれた故の命名であったのであろう。染子が和歌に相当に熱心であったのを窺わせるに足る。

最後である。27番歌の試筆（書き初め）の末尾の「そめ」について。染子が自らを呼んで「そめ」と記し付けたのであるが、通行「染子」と表記する彼女の発音は、「そめ」であったと知られる。

女子の名は果たしてどう発音されていたのかは常に不安な点で、一条天皇中宮彰子でさえ「アキコ」と発音される決定的な証拠はなく、「シヨウシ」に留める向きが多いし、それが果たして本名（もとな元名。女性が独身時代に呼ばれていた名）かとなると、一層判断がしにくくなる。

かつて「平安期における女性の名前考―皇妃に見る命名の由来―」（宮川葉子『源氏物語の文化史的研究』補説〔平成九年十二月・風間書房〕）において、「婚記」（『群書類従』巻第五百二十五）をおもに参照しながら、女性の名前を考察したことがあった。本名と名字（めいじめいじ。出仕や結婚を境に改めた名）が区別して示され、しかも万葉仮名で発音が表示されているありがたい例もあったものの、結局大半が不明という結論に終わった。本名と名字の二つを持っていた可能性は、男性の元服名などから察してありそうであるが、では実際にどう呼ばれていたかとなると知れない。

本論の趣旨からは外れるのでこれ以上は述べないが、『松陰日記』の作者町子にしてからが、系譜には本名は「弁子」とあり、名字が町子（まちこまちこ）と呼ばれていた可能性は高い）であったと思われる。染子の本名は知れないものの、「そめ」と呼ばれていたことだけは確かであろう。

（八）

見てきたように、「染子家集」に収録される染子詠はわずか三十八首に過ぎない。しかし、吉保が染子の逝去後、自らの文匣に残る詠を探し

だし、「染子家集」として手鑑に仕立てたところには、世継ぎ吉里生母への絶大な思いを認めねばなるまい。

「わずか三十八首」と述べたが、これには理由がある。吉保が綴った「染子家集」の序文に、「染子より贈答の哥、まへくのは元禄十五」とし、四月五日に焼失」(二〇)してしまったとあるのがそれである。

元禄十五年(一七〇二)四月五日、神田橋にあった柳沢邸は、「下の屋」(身分の低い家臣の宿所)から出火し全焼。綱吉のための御成御殿も焼失。家族は各別邸に別れて避難生活を余儀なくされる。三條西実隆が「舟流したる」云々と詠んで奥に書き付け、駿河今川へ譲渡した所謂定家筆天福本『伊勢物語』をはじめ、多くの古典籍が灰燼に帰したのもこの時であった。染子と吉保との贈答和歌も、これにより焼失してしまう。従って現存の「染子家集」には、元禄十五年(一七〇二)秋の一番歌以降、染子逝去の宝永二年(一七〇五)四月朔日の「更衣」の38番歌までの、足かけ四年分の染子詠しか収載されていないということになる。

但し序文に「染子より贈答の哥、まへくのは」云々とあるのに推し、それ以前にも「染子より贈答の哥」が存在したのは疑いなく、それは吉保と染子の二十年余の関係に鑑み、最低でも現存「染子家集」の五、六倍の歌数が想定できる。また柳沢邸ではしばしば私的な和歌会が催され、そこでも染子は詠じていたから、かなり多数の歌数を詠んでいたはずなのである(25番歌以降がそれらの一部であり、歌会はおもに吉保の居間でなされていたことなど既述)。

以上見てくると、吉里が父吉保のみならず、母染子からも歌才を譲られ、生涯に二万首余の歌を詠み、「積玉集」をはじめとする私家集を編纂する必然に思いいたるのである(吉里の私家集については、拙稿「徳川大名柳沢吉里の文芸活動―歌人としての成長を中心に―」(『文学・語学』第一三〇号・平成三年七月)などで述べた)。

(九)

述べて来たように、飯塚染子は恐らく十九歳ほどで吉保側室となり、子供のできない正室曾雌定子に代わってお世継ぎ吉里をなしたのであった。染子の享年(三十九歳)に鑑み、吉里出産時は二十一歳頃か。

かたやそうした側室の存在を認めざるを得なかった定子の立場とは、いかなるものであったのか。『源氏物語』にも多く語られるように、一夫多妻故とは知りつつも、嫉妬に苦しむ感情が定子になかったとは言い切れないからである。

しかし医学も科学も進んだ現在と違い、幼児が育つ確立が極めて低かった当時（染子が産んだ五人のうち、吉里のみ生き延びていた）、側室を入れてお世継ぎを確保し、お家安泰を図るのが暗黙の掟。個人的な嗜好を持ち出すゆとりはないのである。

「石女」。「ウマズメ」。多くの国語辞書は「子供のできない女」と解説する。昨今はこうした差別用語も影を潜め、不妊に対する医学的研究も進んでいるが、婚姻後、十年近くも子をなせないなら、側室の存在を容認せよというのが、当時二十六、七歳の定子に突きつけられた状況であつたと想像される。

もつともこの間、一族の女子三人、即ち土佐子（折井市左衛門正利女、黒田豊前守丹治直重室）、永子（折井淡路守正辰女、松平右京大夫輝貞室）、悦子（曾雌庄右衛門女、内藤山城守藤原政森室）を養女に迎え、そこに婿を娶る構図も練っていた吉保夫妻ではあつたが、やはり吉保直系のお世継ぎの存在は、吉保が綱吉の寵臣であればあるほど必須になつていたのである。子供が出来ないのは、夫婦何れの側の欠陥かは知れない。側室を入れた上で判定を下すべきであらうというのが一族の結論であつたらしい。

そこに側室として染子が入った。以後は男児誕生の有無に拘わらず、生涯定子は染子との同居を強いられるのである。妻妾の同居を穩便に送る工夫は各家にまかされた個人的問題であつたのであろうが、一個の女性として感情面から付度する時、それは決して生やさしいものではなかつたと思われる。

しかし『松陰日記』や「楽只堂年録」からは、妻妾間の確執などほんのわずかも浮かび上がっては来ない。そこに存した緩衝材は、正室と側室の厳然たる区分、すなわち妻妾間の身分秩序の保持であつたと考える。それは「楽只堂年録」での呼称の表記にもっとも顕著に現れている。定子は常に「妻」と表記されるが、染子は「吉里が実母」（漢文体では「吉里産母」）の表記で、あくまで子供の母親としてのそれに過ぎないのである。これは町子やその他の側室の場合も同様で、町子は「安通が実母」（安通は町子腹の男児）といった具合であつた。

また綱吉御成の場合には、「女輩」（柳沢家に集う妻妾達を「楽只堂年録」は斯く呼ぶ）を代表して挨拶をなし、拝領品、献上品を第一に授受するの

子の役目であった。さらには元禄十五年（一七〇二）三月に江戸城に招かれ、綱吉と御台所から歓待を受けたのも定子一人である。こうした所に見られるのは、定子に女輩の支配が任されていた構図なのである。女三宮降嫁までの紫上の立場を彷彿させる。とはいえ、そこは女性。内心は悶々としたものもあつたことであろうが、定子の性格の良さも手伝たのであろう、少なくとも表面的には穏便が保たれていた。

もつとも柳沢家では、妻妾間の軋轢がおこりにくい配慮もなされていたと考える。それは、各女輩の生活空間がきちんと確保されていた点にある。察するに柳沢家は、吉保個人の生活空間と、女輩達のそれは別仕立てになっていた。もつとも、主人が公務に関係する「表」と、私生活の空間「奥」の区別は、江戸城をはじめ、大半の上級武家の邸で見られるのであるが、柳沢家の女輩達は、各自所生の子供、乳母、侍女達と別棟形式の、かなり独立性の高い住居に暮らしていたのである。それは光源氏が晩年に営んだ六条院の各町を想起させるような壮大さでもあつた。ごく早い時期（元禄二年（一六八九）三月）、吉保は常盤橋に屋敷地を拝領、そこに建設された私邸でさえ、既に「三つ葉、四つ葉に殿造りて」と表現されている（『松陰日記』巻第一「むさし野」一三六頁）。

これは初音巻の臨時客の盛宴に、六条院の栄華を讃えて謡出された催馬楽「この殿は」の一節で、町子が意識して引用したのは間違いない。それだけに、柳沢邸の広大さも忍ばれ、女輩同士が不必要な接触を持たずに独立して過ごせる生活空間の確保がなされていたと述べた所以でもある。その意味でも前述の松戸亭は染子が誰にも邪魔されない空間であつたと思しい。

（十）

女輩を仕切る立場にあつた定子。しかし本来が頑健な身体ではなかった。早く元禄六年（一六九三）四月から五月にかけての一箇月、箱根の塔の沢温泉に湯治に出かけているし（『楽只堂年録』第十六卷・十七卷）、宝永四年（一七〇七）などは、七月から十月まで病臥。折から江戸に下向していた黄檗山万福寺の第八世、悦峯和尚に吉保は病氣平癒の祈禱を依頼したりしている。

そしてその六年後の正徳三年（一七一三）九月五日に定子は逝去。五十四歳であつた。

正徳三年とは、吉保が下屋敷六義園に妻妾共々隠退して（宝永六年（一七〇九）一月、綱吉が薨去すると吉保は早速辞任を表明。許されて六義園に移り住んだのは同

年六月十八日）足かけ五年後にあたる。和歌の世界を堪能しながら余生を楽しんでいた頃である。

一方吉里は、隠退した父を承け家督を相続。翌宝永七年（一七一〇）五月には、領国甲斐へと参勤交代の初旅に出発。正徳三年は四月三日に甲府を発し、同月六日に江戸に到着しているから（『参勤交代年表 上―宝永七年より安永二年まで―』柳沢史料集成 第六巻・平成九年十一月）、定子が逝去した九月は在府。その臨終にも立ち会えたはずである。因みに「楽只堂年録」は吉保隠退と同時に、吉里の「福寿堂年録」に受け継がれるから、「楽只堂年録」にも『松陰日記』にも定子逝去の記事はない。

その後定子逝去の翌年の正徳四年二月九日に江戸を発った吉里は、同月十二日に甲府着。しかし、同年九月二十七日、吉保病臥の報が入る。そこで十月九日、吉里は出府願を提出。許可されて同月十一日に江戸到着。父の看病にあたるが効果なく、十一月二日、吉保も逝去。享年五十七歳。定子の一周忌を済ませた直後にあたっていた。吉里は、甲斐国を拝領しながら定府のため一度も国に赴くことのなかった父の遺骸を甲府まで運び、龍華山永慶禪寺へ埋葬する。これは吉保の遺言であった。永慶禪寺は吉保が生前、黄檗山万福寺の悦峯和尚に相談し建立しておいた自らの菩提寺。そこには前年、定子が葬られていた。

享保九年（一七二四）四月十二日、吉保と定子は、吉里の手によって恵林寺に改葬された。吉里が大和郡山へ転封になったからである。武田信玄の家臣団として活躍した柳沢家と曾雌家。甲斐国主に至った吉保夫妻を改葬するのに、恵林寺はいかにも相応しかった。今も二人の立派な墓が並んで恵林寺に残る。

永慶寺自体は吉里が郡山城に隣接する地点に遷した。現在も郡山に柳沢家の菩提寺として残り、その本堂には吉保と定子夫妻の座像が安置され、吉保の先祖から近々までの柳沢一族の位牌が整然と管理されている。

一方、柳沢文庫には「万歳集」（『柳沢家譜集』同上収載）と題された、歴代の家族を生誕順に列記した過去帳がある。その吉保、定子に関わる項には次のようにある。

第二十世吉保公

永慶寺殿保山元養大居士

正徳四甲午年十一月二日

甲州山梨郡山窪村 龍華山永慶寺

享保九甲辰年四月十二日

同国同郡小屋舗村 乾徳山恵林寺へ御改葬

吉保公之御前様

曾雌甚左衛門盛定様御女於定様

正徳三癸巳年九月五日

右同上

これによつて、永慶寺から恵林寺への改葬も確認されるのである。左記に翻刻する吉里の哀悼文が恵林寺所蔵となつたのも、こうした経緯があつたからであつた。さらに哀悼文のみならず、吉里が定子の霊前に贈つた石灯籠も恵林寺に移されている。その台には、今は苔むしてはいるものの、

右燈台 式基

真光院殿海月映珊大姉霊前

正徳三年癸巳九月五日

嫡男国主侍従吉里

と彫られた文字が確認できる。様々な人間的感情を措くならば、定子はあくまで「吉保公之御前様」と呼ばれ、「嫡男」から石燈台二基を贈られる存在であった。定子は側室の存在に脅かされることもなく、また脅かすような側室もおらず、吉保の異例の出世により、その正室として厳然たる立場を保持できたのではなかったか。

(十一)

吉里が定子のために自作し、かつ自筆で認めて供えた哀悼文にうつろう。奉書紙に書かれたそれは、一行平均二十字、日付と署名の行もいれと、全二十四行からなる。現在は軸装になっているが、初期からそうであったか否かは俄には判断できない。ただ、総じて柳沢家はこうした文書の扱いを丁寧にしており、永慶寺に納める時から装幀が加えられていたものと考えている。

なお翻刻にあたっては、必要最低限の句読点と濁点を私に付した。また、一行の文字数も行数も原典に忠実にしたため、二段構えになっている。

あるを見るだに悲しきこず糸の秋の初つかた、

いかなりけるうき日にや、母のかりそめなるやうにあつ

しくおはしけるを、月ごろもすくよかならぬみな

らひに、やがてさはやぎ給ひなんと、みくすりなどすゝめ

奉り、ひとひ、ふつか心み侍るうちに、いとうおもらせ

給ひ、くすし典薬の数く、神にもねがひをたて、

仏にずほうをこなひ、ことぶきをいのり、あしを

そらになし、心ざしを尽しつるやくもなく、たゞ

そのほどに今はの水をたむけ奉りしぞ、せん

世のつとめによりてとをざかり侍ても、御心のうち

には露もわすれ給はぬあはれびのみけしきなりし。

こゝろおさなくて、御いたはりつかへ奉ると思ふばかりの

事もなし侍らす。これをおもへば、たゞわか身ひとりの秋と

おぼえて、くるしみやらんかたなし。せめてなき御からを

かひあるさまにもと、まもれる国の龍華山に、その

暁の月かけてをくり奉る。いまや

真光院殿と、なふるも、夢のうちの夢心して、

かきつらね侍りき

すべなきなげきの袖、紅に染、藤の衣露にしほれて、

つくぐと思ふに、いはけなき比より、此御いつくしみ

ふかく、ひるよるめでなづそひ給ひ、ひと、なりては

せきとむる袖もなみだにかきくらす

みだりこゝろぞいかにはるけん

正徳三年九月十八日 侍従源朝臣吉里

一行目の「あるを見るだに悲しき」は、『古今和歌集』巻第十六哀傷歌、「きのとものりが身まかりける時によめる」の詞書をもつ紀貫之の歌、「時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだにこひしきものを」（八三九番歌）を引歌としているのは間違いない。

片桐洋一氏著『古今和歌集全評釈（下）』（一九九八年二月・講談社）の【通釈】には、

（紀友則が亡くなった時に詠んだ歌）

時節はほかにもあるのに、選りに選つて秋という季節に人が死別するなんて。秋という季節は生きている人に逢っても恋しい気持ちが切実であるのに。

とある（三七頁）。古今伝を父吉保から受けた吉里にとって、面目躍如たる書き出しと言えよう。

「母のかりそめなるやうにあつくおはしけるを」の「かりそめなるやうに」には、まさかこれが重態のきっかけであるはずはないと、全快への祈りが籠められていながら、続く「月ごろもすくよかならぬみならひに」には、年来頑健ではなかった定子の健康状態への懸念が広がっている。周囲は、復活を期待しつつ服薬を勧める。

しかしその効果はなく、一兩日のうちに「いとうおもらせ給ひ」、危篤状態に陥つたらしい。「くすし典葉の数く、神にもねがひをたて、仏にずほう」をおこなう。医学的な治療は勿論、神に願を立て、仏に修法（加持祈祷）をさせるのである。「あしをそらになし、心ざしを尽しつるやくもなく」結局定子は逝去。ここの「あしをそらに」は、須磨巻で、三月上巳の祓えの折の俄な暴風に人々が度を失う場面に、「足を空にて」

とあるのを想起させる。急激な状況の変化を須磨巻の暴風に重なる所に、吉里の『源氏物語』への傾倒が伺える。というのも、吉里は、宝永七年五月に甲府へ着任した直後から、吉保お抱えの国文学者であった柏木全故（たけもと そりよ）を師匠に、『源氏物語』全巻を半年ほどで読破しており（宮川葉子「徳川大名柳沢吉里と『源氏物語』―「詠源氏卷々倭歌」を中心に―」〈近世文芸55・平成四年二月〉）、当該定子への追悼文に充分知識を生かせる状況であったからである。

祈りも投薬も空しく、定子はあの世へ旅立つ。「せんすべなきなげきの袖、紅に染」と吉里は綴る。「せんすべなき」人知を越えた力には無抵抗である以外にない。吉里は「なげきの袖」を「紅に染」めたという。勿論「紅涙」は悲嘆の底で流す涙のこと。所謂腹を痛め産んでくれた実母ではないにも関わらず、あるいは文飾かもしれないながら、吉里は、「紅涙」を流したというのである。そして「藤の衣、露にしほれ」ながら、つまりは喪服の袖を涙に浸しながら吉里は回想にふけるのである。それが以下の追悼文の中核をなす。

いはけなき比より、此御いつくしみふかく、ひるよるめでなづそひ給ひ、

とは、吉里の幼時体験である。「此御いつくしみ」は申すまでもなく定子のそれ。定子は吉里の幼時から、彼をいとおしみ、昼夜可愛い存在としてまわりつかせていたというのである。

ここに見えてくるものは何か。定子が吉保のお世継ぎとしての吉里を、実子でもそこまではといえるほど愛育した姿ではないのか。『源氏物語』では、明石御方が姫の将来を思い、紫上に託する悲しい母子の別れが描かれるが、吉里の場合もそれを彷彿させるのである。『松陰日記』にも「樂只堂年録」にも、吉里が実際には如何様な環境で育てられたのか、実母との密着度はどの程度であったのか、などということは聊かも描かれていない。しかし「此御いつくしみ」には、吉里が定子のもとで過ごす日時が多く、故に定子に馴染み親しんでいた姿が想起されてならない。

吉里は「ひと、」なった。成人し参勤交代をなす立場になったのである。それでも定子の「御心のうち」には、「露もわすれ給はぬあはれびの

みけしき」が漲っていた。

そんな嫡母に対し、吉里自ら振り返る。「こゝろおさなく」て、配慮が至らないため、お世話になったご恩返しに、「御いたはりつかへ奉ると思ふばかり」で、まともに実行出来ずにしまった。それを考えると、まさに「たゞわか身ひとりの秋とおぼえ」てならず、深い悲しみに苛まれるのであると。

「わか身ひとつの秋」云々は、『小倉百人一首』に収載されて有名な、「これさだのみこの家の歌合によめる」の詞書をもつ大江千里の歌、「月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」(古今和歌集 巻第四秋歌上・一九三番歌)を踏まえる。千里の歌は、悲しみは自分だけではないとの発想であるが、吉里はそれを「たゞわが身ひとりの秋」と受けとめ、嫡母を喪った悲しみを自分一人に向ける。一般論はどうであれ、私一人が「くるしみやらんかなし」なのだという強い思いの表出である。

そこで吉里は「せめてなき御からをかひあるさまにも」と思う。定子の亡骸を「かひあるさまにも」とは、「甲斐」国の国主である自らの立場として、甲斐ある状況に葬りたいというのである。吉里は「まもれる国の龍華山」、即ち永慶寺に、「暁の月かけて」葬送を行った。

定子の法名は真光院殿。法名のみが残された嫡母の死を、「夢のうちの夢心」としてしか捉えられない吉里。歌を詠む以外になかった。その和歌が、「せきとむる袖もなみだにかきくらすみだりこゝろぞいかにはるけん」であった。袖を濡らす涙にくれている日々、「どうしたら気持ち晴れるのか。その方法はあるのか」という意味であろう。

嘗て実母染子の死に際し、かなり長期にわたって吉里が「朦気」にあったことは見てきた通りである。嫡母の死の悲しみを「みだりこゝろ」とするそれは、まさに朦気であろう。吉里には、実母と嫡母の死に際する感情に隔てはなかったと言うべきか。

勿論追悼文など、文飾に次ぐ文飾で、本当の思いなど伝わって来るわけもないのかもしれない。しかし、吉里のこの追悼文の中には、実母染子と確執があったような定子の姿は見えてこない。のみならず吉里はひたすら嫡母から愛され、それを糧として生きてきたのではなかったか。何も親孝行らしいことも出来ずに終わってしまったお詫びの印に、定子を自らの領国甲斐国の龍華山永慶寺に葬るのだ、と述べる吉里の追悼文中に、文飾だけではないものを感じる。

吉保の妻妾達の束ね役を演じるしかなかった石女うますめの定子。しかし、「吉保公之御前様」(前掲「万歳集」)として、最初の側室に生まれた吉里を、なさぬ仲といった視点では捉えず、我が家の世継ぎとして精一杯いとおしんだ姿は、柳沢家の後の発展に鑑みる時、吉保正室として、まさに賢夫人として人後に落ちない見事な姿であつたといふべきであらう。

むすびにかえて

柳沢吉保には六人の妻妾がいた。その第一番が飯塚染子。吉保正室定子に子供ができず、婚姻後約十年後に迎え入れられた側室で、お世継ぎ吉里をなすことができた。しかし、染子はそれを嵩かさにきるような女性ではなく、その家集「染子歌集」に見る限り、吉里へ文芸の才を譲り渡すに充分な格調高い婦人であつたと思われる。

かたや正室定子も、側室腹だからと、吉里に敵意を見せることはなかつたどころか、彼を柳沢家の嫡男として大切に愛しんだ。このあたりは、あるいは『源氏物語』でもっとも性格美人として描かれる花散里が、葵上亡きあと、夕霧の母親役としてしっかりと根をはってゆく姿に重ねて見てみてもよいのかもしれない。

子供が生まれても、三歳足らずで多くが死に至つた時代、武家社会ではなんとしてでも男児の誕生を確保する必要があつた。その意味で、五人の子をなしながら、吉里のみが生き延びた染子とは異なり、二人ともを成人させ得た町子の運の強さは、『松陰日記』執筆や、霊元院に評価された「千首和歌草」(詳細は拙著『柳沢家の古典学(上)―『松陰日記』―』(前掲))などにも伺えるのであるが、それはそれとして、決して目立とうとはせず、しかし、しっかりと足場を持っていた正室定子。そして、決して定子をないがしろにすることなく、吉里にあれほどの追悼文を書かせた側室第一号の染子。

彼女達の関係は、江戸期の武家の妻妾の鑑であつたのかもしれない。

〔附記〕 本稿をなすにあたり、史料の閲覧、マイクロフィルムの複写等を許可下さり、あたたかいご支援をなして下さった柳沢文庫の皆様方に、紙面を借りて感謝申し上げます。ありがとうございます。

（受理 平成二十一年一月十日）

みやかわ ようこ.. 淑徳大学 国際コミュニケーション学部 文化コミュニケーション学科 教授